

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.133-144)

<調査研究速報>

## ティカル遺跡における土器焼成址の検出の可能性について

—遺構の検出状況の検討と出土土器の分析による推定—

今泉和也 (北海道大学文学研究院) 、  
レオネル・シセ (ヤシャーナクム-ナランホ国立公園)

The Possible Detection of Classic Period Kilns at Tikal:  
Estimations through a consideration of contexts and a ceramic analysis

Kazuya Imaizumi  
(Hokkaido University, Graduate School of Humanities and Human Sciences)  
Leonel Ziesse  
(Yaxha-Nakum-Naranjo National Park)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua  
Japan Society for Studies of Ancient America

<調査研究速報>

## ティカル遺跡における土器焼成址の検出の可能性について

—遺構の検出状況の検討と出土土器の分析による推定—

今泉和也（北海道大学文学研究院）

レオネル・シセ（ヤシヤ-ナクム-ナランホ国立公園）

### 1. ティカルにおける土器生産に関する先行研究

本稿ではティカルにおける土器生産址のひとつとして土器焼成址を取り上げるが、ティカルにおける土器生産活動の推定についてはマーシャル・ベッカーによって行われている [Becker 2003]。彼は主に建造物内部の詰土から多量の精製土器片が出土したこと、土製仮面が出土したこと、小像や香炉の型が出土したことといった間接的な証拠を根拠に、エリア 4H (図 1) を土器生産区域と推定した [Becker 2003: 97-99]。

エリア 4H には雨季に出現する湿地帯（季節的湿地帯）に対して半島状に突き出した台地がある。この台地上に居住した人々が土器工人集団であり、湿地帯に堆積する粘土を原料として、また湿地帯に群生するヤシ科植物を燃料として利用して土器生産活動を行っていたと推測した [Becker 2003: 95]。

加えてベッカーは古典期における土器焼成方法は堀込型窯 (Pit Kiln) であったろうと推測している。また土器を製作・焼成した場所として建造物グループの広場や建造物グループ群の周辺の共有空間を指摘しており、その活動空間における木造建造物の存在を想定している [Becker 2003: 96, 106-107]。

2016 年に実施した調査では、エリア 4H と同様の立地条件にあるエリア 6H (図 1) の建造物グループ 1 の広場において柱穴と考えられる土坑を検出した。この成果によって、広場に木造掘立建物が存在し、その下で土器製作活動を行っていたとするこれまでの想定に具体的な根拠を与えることができた [Imaizumi and Ziesse 2017]。しかしこれまでにティカルにおいて土器を焼成した場所を示す具体的な証拠は発見されていない。

先行研究ではいくつかの土器焼成址の可能性のある遺構が発見されてきた [Ciudad Ruiz and Beaudry-Corbett 2002]。しかし特に古典期の主要なマヤ遺跡では十分な「間接的な証拠」<sup>(註 1)</sup> を伴う明確な土器焼成址は検出されておらず、当時の土器生産体制については明らかにされていない。そのため代表的なマヤ遺跡であるティ

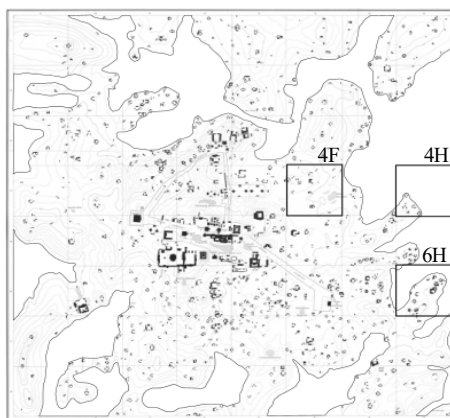


図 1. ティカルの測量図 (16 km<sup>2</sup>) と各エリア (500m 四方) の位置 (Carr and Hazard [1961]の図を加工)

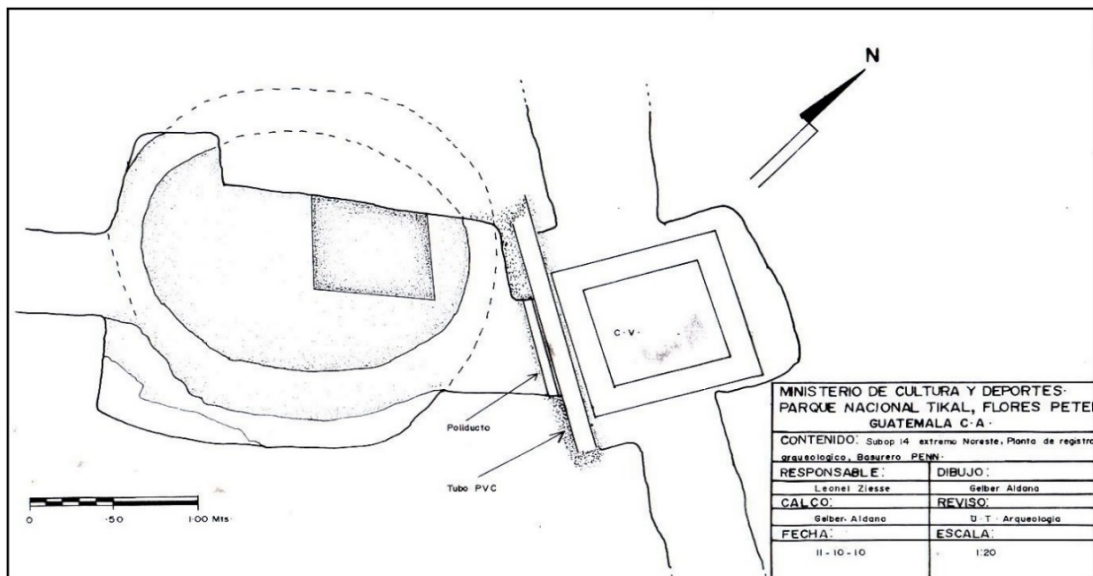


図2. 報告書中の Op.14 の土坑の平面図 (Ziesse [2010]より転載)

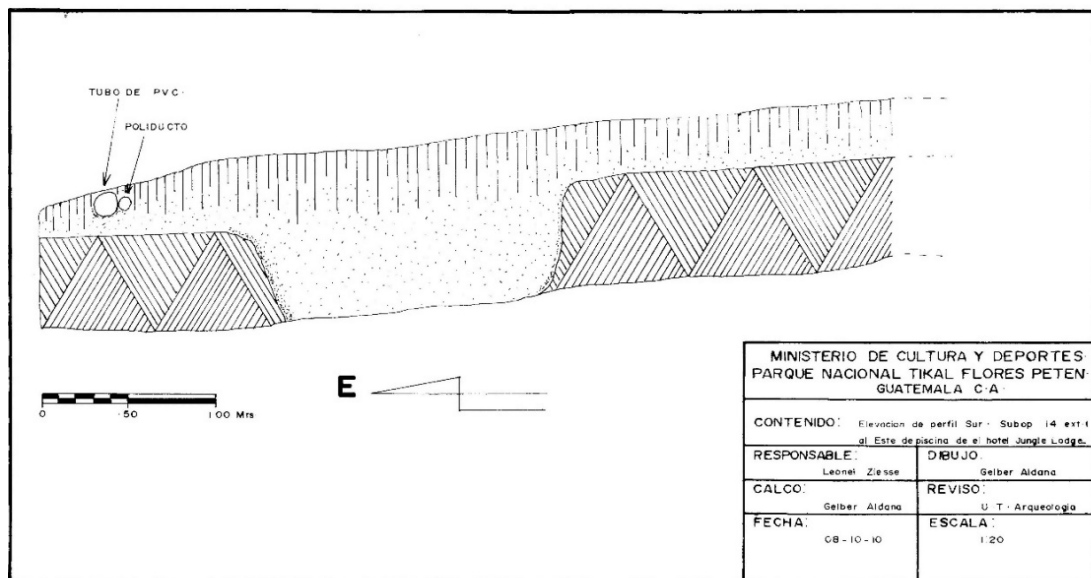


図3. 報告書中の Op.14 の土坑の断面図 (Ziesse [2010]より転載)

カルにおいて土器焼成址を検出することは、古典期における土器生産体制を明らかにする上で重要な課題である。現在のマヤ土器研究では土器編年の構築がひと段落し、発掘調査報告に伴うタイプ記述による個々の遺跡の性格付けだけではなく、碑文研究で語られる都市間の関係を考古学的観点から検討していくことが求められているだろう。特に碑文資料にはほとんど見られない諸都市間の経済関係に迫る上で、ティカルの土器の生産体制を検討することは古典期中部低地における土器の生産と流通の実態を明らかにするための重要な基盤研究となると考える。

## 2. 遺構の発見の経緯について

2010年、ティカル国立公園内の管理事務所やホテルといった施設に対して下水管を設置する目的で、水道会社によって掘削作業が行われた。この作業に関する報告書はティカル国立公園管理事務所に対する内部向けの事業報告書としての性格が強く、刊行されていない [Ziesse 2010]。

報告書によれば、水道会社の作業員は堀り具や重機を用いておよそ40cm～100cm幅の細長いトレンチ状に掘削作業を行った。ティカル国立公園の管理・サービスエリアに所在する全ての建造物が新たな排水管設置の対象となり、トレンチの全長は直線距離にして3462.1mに及んだ。この掘削作業の過程でエリア4Fに位置するホテル・ジャングルロッジのプールの東側にて、トレンチの断面に土坑 (Rasgo de Op.14) が確認された。その後、ティカル国立公園所属の考古学者によって拡張区の設定と発掘が行われ、土坑の形状を示した図面が記録された (図2,3)。

掘削作業に関する報告書では、この地点はペンシルヴァニア大学調査団が土器分析を行っていた地点と考えられることから、ティカルプロジェクトが実施された1950～60年代に作られた近代的なゴミ捨て場であろうと評価した。そして土坑の壁面である石灰岩が焼けたような状態であることから、始めに紙類等のゴミを焼却する場として用いた後に、不要な土器資料を廃棄する場として用いたのであると結論付けた [Ziesse 2010: 22]。

発見の経緯として考古学的な調査の中での発見ではなかったため、十分な確認調査や図面等の記録が行われなかった。また遺構から出土した資料の分析がなされることもなかった。本論では遺構の検出状況の検討と出土資料の分析から、2010年度に発見された土坑が土器焼成址である可能性を指摘する。

## 3. 土坑の形態について

ベッカーは古典期マヤにおける土器焼成方法・形態を堀込型窯と推定している (図4)。特にティカル遺跡においては、エリア4Hの建造物グループ1における調査成果からトレンチ形状の堀込型窯が用いられていた可能性を指摘している。また大型の窯は西暦1500年以降のスペイン期に現れることから、民族誌事例を参考に古典期マヤにおける窯のサイズは内径が150cm以下であったろうと推測している [Becker 2003:106]。

Op.14の土坑は、図2に見られるように楕円形の形態を有している。円形の堀込型窯に分類される形態である。

報告書によれば、土坑の長軸が240cm、短軸が180cm、深さが130cmである。図面から読み取れる内径は長軸が190cm、短軸が130cmである [Ziesse 2010: 20]。

このデータからOp.14の土坑のサイズは、ベッカーが推定する古典期マヤにおける堀込型窯のサイズよりやや大きめであることが分かる。しかし調査精度の問題が大きいと、掘り過ぎ等の理由から本来のサイズより大き

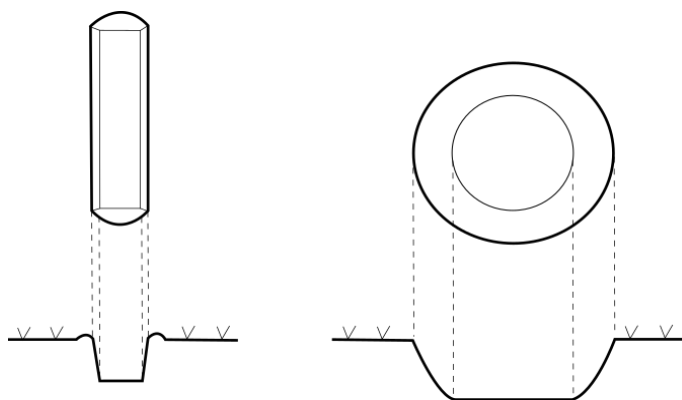


図4. 堀込型窯の形態 (左:トレンチ形、右:円形) ; 筆者作成

く捉えられている可能性がある。そのため Op.14 の土坑は形態としては円形の堀込型窯（図 4 の右図）と判定して問題ないであろう。

#### 4. 土坑の位置と他の土坑の存在について

Op.14の土坑の正確な位置が不明であったため、トータルステーション（Leica TCRP 1205+）を用いて土坑の位置をエリア 4F の測量図上に示した（図 5）。

報告書では土坑の位置は 1950～60 年代にペンシルヴァニア大学によって実施されたティカルプロジェクトの宿舎と関連付けられていた。しかし実際の Op.14 の土坑の位置は、キャンプサイトから北西方向に 120m 離れた地点である。そのため Op.14 の土坑が当時に作られた近代的なゴミ捨て穴であるとは考えにくい。

またホテル・ジャングルロッジの周辺では多量の大型土器破片が出土する地点（Op.26, Op.27, Op.28, Op.30）が確認されている。これらの地点から出土した資料が、多彩色土器や大型石槍、擦り棒といった重要な資料を含むことから、Op.14 を含むホテル周辺の各地点が近代的なゴミ捨て場である可能性は低いと考えられる。

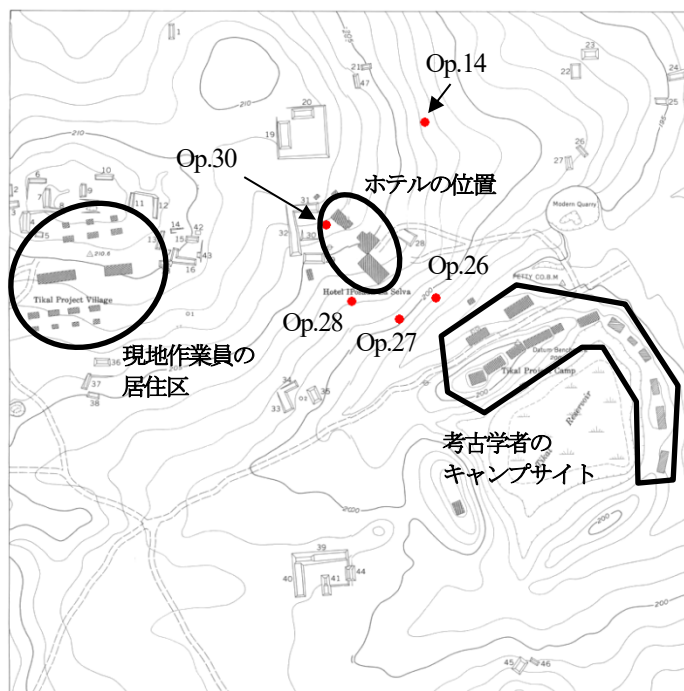


図 5. エリア 4F における遺構の位置と周辺の関係（Carr and Hazard [1961]の図を加工）



写真 1. 土坑（Rasgo de Op.30）の東壁断面；  
Ziesse [2010] より転載

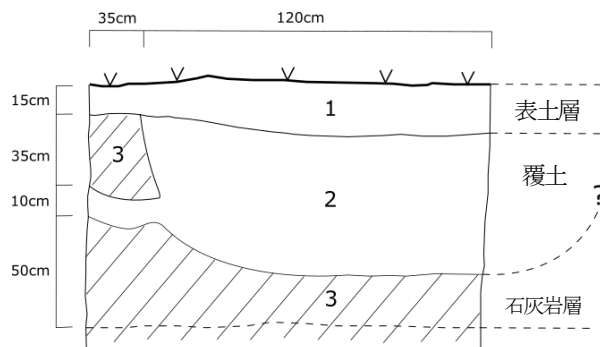


図 6. 土坑（Rasgo de Op.30）の東壁の推定断面図；  
筆者作成

多量の大型土器破片を出土した地点の内の一つである Op.30 では石灰岩層を 65cm ほど掘り下げた土坑が確認された(写真1)。この土坑(Rasgo de Op.30)は考古学者による調査が行われず、図面等の記録はない。記録として撮影された数枚の写真から推定した断面図は図6のようになる。恐らく Op.14 と同様の円形の堀込型窯の形態であり、同程度のサイズを有すると考えられる。

Op.30の土坑の特徴は、北側に見られる細い管状の掘削痕(図6左側)である。この土坑が土器焼成址であるならば、煙道のような機能を有する構造物の痕跡の可能性はある。ベッカーによればマヤ地域での穴窯の登場は後古典期を想定しているが、ロペス・ヴァレーラらがベリーズのカシヨブ遺跡で検出したように焚口・焼成室・煙道を有する穴窯が古典期においてすでに成立していたとするならば、Op.30はティカルにおける穴窯の事例となり得るであろう<sup>(註2)</sup> [Lopez Varela et al. 2001; Becker 2003]。しかしベッカーや筆者が古典期ティカルの土器焼成方法として推定している堀込型窯は覆い焼きに分類されるものであり、煙道が不要である。そのためOp.30の遺構がどのような性格のものであるのかを検討するには追加の発掘調査を行う必要がある。

またOp.30の土坑は建造物群(Str.29-32)の広場の東側に位置する。この位置は当時のゴミ捨て場の位置(通常、建造

	資料数	重量	1資料当たりの重量
Op.14	593点	13098g	22g/点
6H-Op.8	1387点	13899g	10g/点

表1. Op.14 と 6H-Op.8 における出土資料の大きさの比較；筆者作成

Op.14	重量	%	6 H-Op.8	重量	%
口縁部	4573g	34.9%	口縁部	2523g	18.2%
頸部	1627g	12.4%	頸部	1937g	13.9%
底部	1430g	10.9%	底部	195g	1.4%
支脚	16g	0.1%	支脚	249g	1.8%
小像	0g	0.0%	小像	112g	0.8%
胴部	4235g	32.3%	胴部	4565g	32.8%
小破片	1214g	9.3%	小破片	4318g	31.1%
Total	13095g	100.0%	Total	13899g	100.0%

表2. Op.14 と 6H-Op.8 における部位別出土量の比較；筆者作成

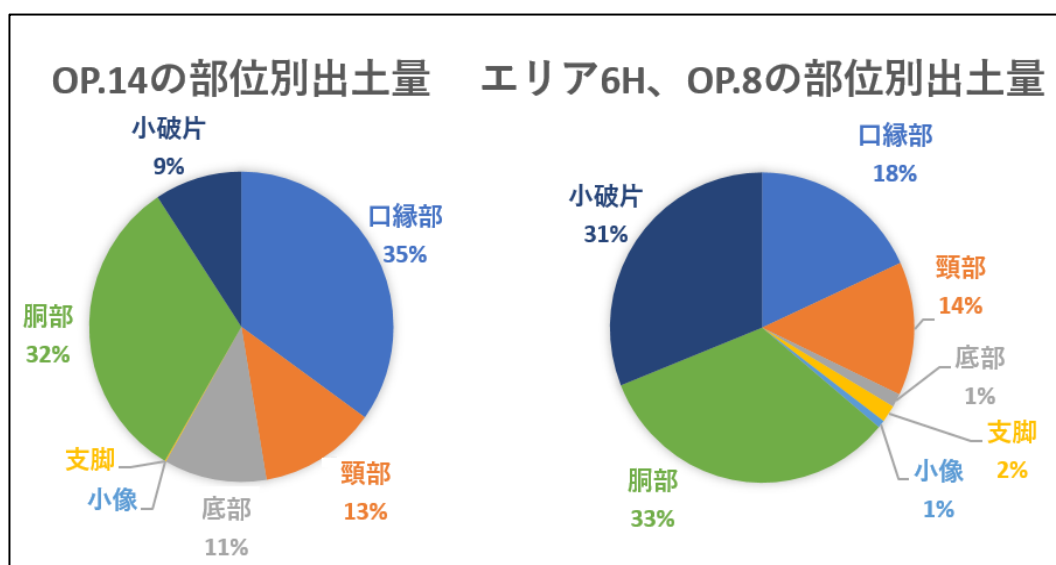


図7. Op.14 と 6H-Op.8 における部位別出土量の比較；筆者作成

物の背面側)とは異なるため、空間的な配置の点においても Op.30 は特殊な遺構である蓋然性が高い。

最寄りの主要建造物群 (Str.4F-19~20, Str.4F-29~32) を中心としたエリアが一つの土器生産区域であったと想定できるならば、Op.14 や Op.30 の土坑 (堀込型窯) の他にも、この周辺に複数の同様の土坑 (堀込型窯) が存在した可能性が考えられる。

具体的には、土器が多量に出土した他の地点にも土坑 (堀込型窯) があつたと推測している。水道会社による工事用のトレンチの面積は合計 2090.71m<sup>2</sup> の広さに及ぶが、土器が出土する箇所は極端に限られており、Op.26、Op.27、Op.28 での出土量は全体のおよそ 50% である (Op.14、Op.30 が 37% を占め、残りの約 13% は遺物集中以外の通常の出土による)。ホテル・ジャングルロッジの周辺の土層の堆積量は現地表面から 30cm ほどであり、その下部は石灰岩層 (無遺物層) であることから、排水管設置用トレンチという限られた範囲内において 200~400 点の大型土器破片が出土することは考えにくい。そのため、これらの発掘区 (Op.26, Op.27, Op.28) では土坑の記録は残っていないが、Op.14 や Op.30 と同様の土坑が存在したと考えている。あるいはプエブラ州、サン・マルコス・アクテオパンの民族誌事例 [Druc 2000: 80, Fig.2] に見られるように、土器生産区域における主要建造物の周辺に失敗品が多量に廃棄される状態を示しているとも考えられる。

以上の土坑群が検出されたエリア 4F は、バックカーの指摘する土器生産区域の特徴である湿地に対して半島状に突き出すような地形を有していない。しかし 1960 年代のペンシルヴァニア大学の調査時に飛行機の離着陸のための滑走路が同エリア東側の湿地帯を埋め立てて造成されたことから、ティカル測量図 (図 1) に示されているよりもかつての湿地帯はエリア 4F に近接する形で東側に広がっていたと考えられる。またこの滑走路の一部は現在のティカル国立公園の駐車場として活用されており、付近における水道管設置のための調査の際に 2 種類の粘土層が確認されている [Ziess 2010]。以上のことから土坑群が検出されたエリア 4F の主要建造物群は古典期においては湿地帯に近接した立地であり、材料である粘土や燃料と考えられるヤシ科植物を容易に利用可能な環境にあつたと考えられることから、先行研究で挙げられる土器生産区域に適した特徴を有していたと判断できる。

## 5. 出土土器資料の特徴

未整理・未分析であつた Op.14 の土坑内から出土した土器資料 593 点を分析した結果、3 つの特徴を有していることが分かつた。

一つ目に、Op.14 の土坑内出土の資料は破片のサイズが比較的大きいことである (表 1)。2016 年度調査において、建造物の背面にて検出したゴミ捨て場 (6H-Op.8) のように、通常のゴミ捨て場における土器資料は小破片資料であることが多い。これは建造物の詰土としてゴミ捨て場のゴミと土砂を用いるために二次的に攪乱を受け、破損するためであろうと推測している。表 1 に示したように、Op.14 の土坑内から出土した資料 1 点当たりの重量はエリア 6H のゴミ捨て場で出土した資料の 2.2 倍の重量を有していることが分かつた。

二つ目に、Op.14 の土坑では一つの時期 (古典期後期) に帰属するグループ、タイプの土器資料が出土することである。エリア 6H の Op.8 の事例では先に述べた二次的攪乱と継続的利用のため、複数の時期 (古典期前期・後期) の土器資料が混在している。また Op.14 では出土するグループ数やタイプ数、形式の種類は比較的小さい傾向にある。Op.14 の土坑では 7 グループ、10 タイプが出土し、内 Cambio グループと Tinaja グループが全体の 74.4% を占めている。Cambio グループはノンスリップ、Tinaja グループは赤色スリップを特徴とし、高い出土頻度を示すことから日用土器と考えられる。また同遺構から出土する土器群は形式では水差し、鍋、鉢の 3 種が

支配的である。

三つ目に、Op.14 では口縁部、底部資料の占める割合が多いことである（表2、図7）。図表中のエリア6H、Op.8の事例のように、多くの場合、胴部資料と小破片資料（分析対象外の小破片胴部資料）が全体の資料数中の主要な資料であり、口縁部や底部資料は比較的少ない傾向にある。またOp.14の土坑内出土の土器資料では、接合する資料、あるいは同一個体と考えられる資料が比較的多いことも特徴である。

以上の三つの特徴から通常のごみ捨て場とは異なるコンテキストが想定される。つまり古典期後期にOp.14の土坑はごみ捨て場として利用されたが、一度に多量の不要な土器群を廃棄し、そのまま埋めて放置したと考えている。またOp.14の土坑を土器焼成址と想定した場合、この土器生産区域では特定のグループ、タイプと形式を限定的に生産しており、その内の不良品・破損品等の不用品を廃棄した可能性を推定できる。

## 6. 土器生産工程における不良品の出土

Op.14の土坑内から出土した土器資料において、粘土の準備時や成形時、乾燥時の問題と考えられる、通常よりひどいひび割れを有する資料を26点確認した（写真2）。

このひび割れは、調査時の衝撃や埋没過程において生じたものとは大きく異なる。ひび割れの程度は激しく粗い整形の印象を受けるが、焼成は十分に行われている。また成形・整形時に重要視する傾向の強い口縁部においても同様のひび割れを有する資料（写真2左）を確認している。このような資料の存在は器面調整のし忘れや、乾燥時に強い日差しや降雨にさらされてしまった等の大量生産時における一種のエラーの結果として生じた可能性がある。



写真2. 激しいひび割れを有した土器資料；筆者撮影

また成形・整形時あるいは乾燥時に変形したと考えられる、歪んだ器形の資料を4点確認した（図8）。図8の1、2の資料は口縁部が大きく歪んでおり、3、4の資料は口縁部と胴部の関係において強い捻じれが生じている。これらの資料に見られる変形は、沈線文の施文痕として見られるようなまだ乾燥していない柔らかい状態の際に加圧を受けたと判定可能なものであり、またこれらの変形は器面に対して局所的に見られた。これらの資料は埋没過程における焼成後の硬い器面に対して少なくとも半周以上の範囲に均等に一定方向の力が加わった結果として生じる、いわゆる土圧による変形とは明らかに異なる様相を呈している。

Op.14の土坑から出土した資料に見られる、激しいひび割れを有する土器や変形した土器の存在は、土器生産活動の存在を示す十分な間接的な証拠である。一方でなぜこのような不良品が生産されるかは検討の余地がある。先に述べたように大量の土器を手工業生産する際の一つのエラーが一つの要因として考えられる。あるいはベッカーが推定するように、特定の家族あるいは親族集団が土器生産活動に従事したと仮定するならば、熟練者である年長者が子供等への教育の一環として練習のために作らせた“未熟な土器”が、変形した土器である



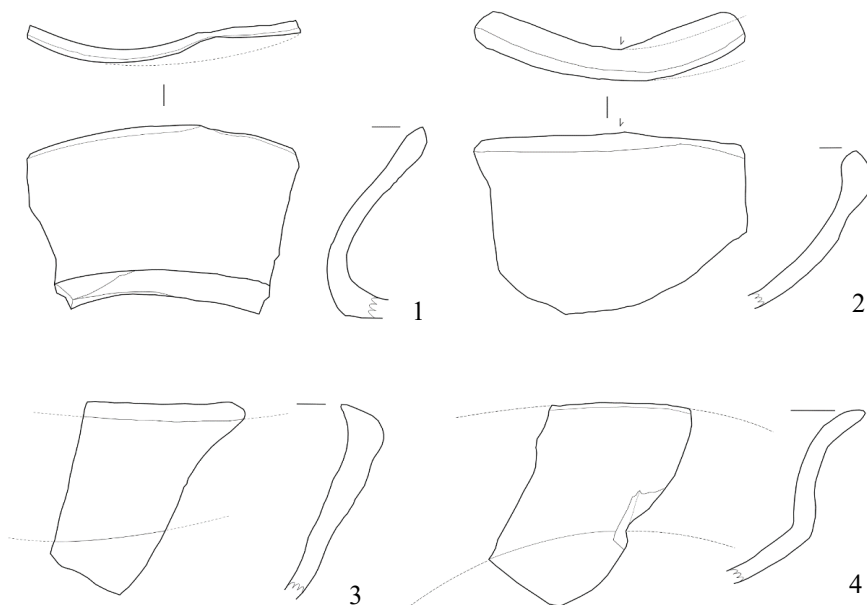


図 8. 口縁部や胴部が不自然に歪んだ土器破片資料；筆者作成



可能性を推定できる。

どのような集団がどの程度の規模で、どこでどのように土器生産活動を行っていたのか、古典期ティカルにおける土器生産体制についての詳細な理解は今後の重要な課題である。

## 7. 器面調整具の出土

Op.14 の土坑内から出土した土器資料の中で、器面調整具と考えられる土製品を 1 点確認した (図 9)。土器破片の再利用ではなく、この形状で成形、焼成されている。

この土製品を右手で握んだ場合、親指の位置が楕円形の凹み部分 (図 9 中の a) に当たる。凹み部分は非常に滑らかに整形されており、また焼成後に微調整した削りの痕跡がある。人差し指の位置が上部の平らな部分に当たり、また残りの指は反対の面の刷毛目状痕の部分に当たる。この刷毛目状痕は文様ではなく、また器面調整の痕跡でもなく、接する指に対する滑り止めの役割を果たした可能性がある。このように右手で握んだ場合、円形の凹み部分の先にある部分 (図 9 中の b) が器面と接する部分 (作用部) になると考えられる。

ティカルの南西、約 30km に所在するモトゥル・デ・サン・ホセ遺跡では、Op.14 出土の土製品 (図 9) に酷似する形態を有する土製品が出土しており、土器生産に関わる直接的な証拠の一つとして提示されている [Halperin and Foias 2010: 398、図 10、写真 3]。Op.14 の土製品と同様に断面形態が細長い二等辺三角形を呈しており、長軸が 5cm 程度と同程度のサイズである。土器破片の再利用ではなく、この形態として焼成された土製品であり、器面の研磨に用いられた器面調整具と評価されている [Halperin and Foias 2010: 401-402]。

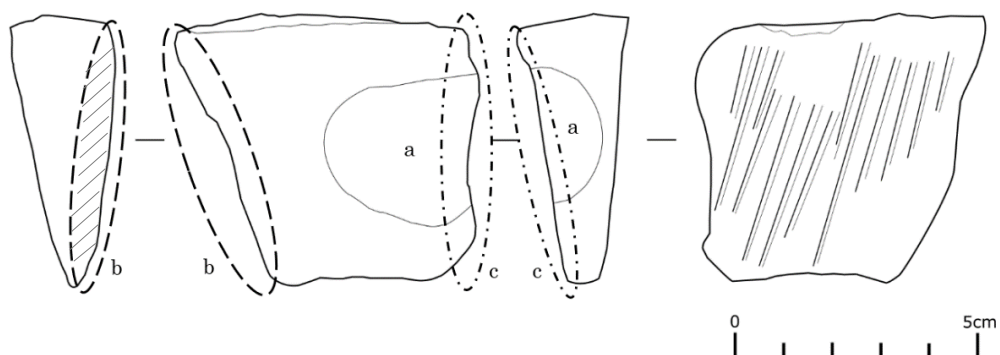


図9. Op.14 土坑内出土の器面調整具（土製品）；筆者作成

図10のa'部分において円状に多くの点描が見られることから、断面には表れていないものの、円形の僅かな窪みがあると思われる。このa'がOp.14の資料におけるaに相当すると考えられる。また使用方法として写真(写真3)が添付されており、図10の実測図の右側から土製品を掴み、c'の位置を作用部としている。しかし類似の形態を有するOp.14の資料の事例では明らかにa部分を右から掴む形態であり、c'に相当するc部分は作用部とは考えにくい。そのため図10の図面は上下が逆転しており、本来は実測図の左側からc'部分を掴み、b'部分が器面に接する作用部であったと考えられる。

この器面調整具資料がモトゥル・デ・サン・ホセ遺跡のアクロポリス内における詰土（二次的なゴミ捨て場）から出土していることから、作用部であるb'部分が欠損したために廃棄された蓋然性が高いと言える。またOp.14の資料の事例では、b部分にて石灰石の粒が露出・抜け落ちた痕跡が見られる。使用時の摩擦によって作用部bの表面に胎土中の石灰石小粒が露出したことで器面調整具としての機能を損なったために廃棄されたと推定できる。以上のことから、この形態の器面調整具の上下は図9に示した通りであり、作用部はb部分と考えられる。

またベリーズの、ウシュベンカ遺跡でも類似の形態の遺物が土器製作道具として紹介されている(写真4)。この事例では多機能道具(施文具+器面調整具)と解釈されており、写真4中1の部分に刻線文を施文するために使用された部

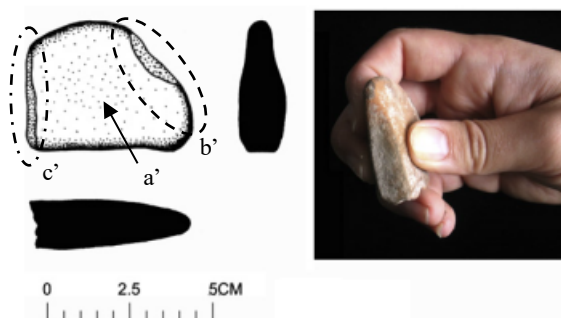


図10. 写真3. 類似の形態を有する器面調整具の事例 (Halperin and Foias [2010: Fig.10]を一部加工)

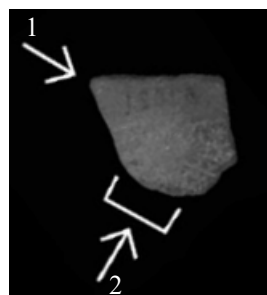


写真4. 類似の形態の器面調整具とその作用部 (Jordan and Prufer [2017: g.4-h]を一部加工)

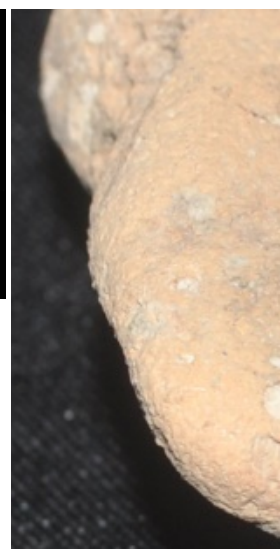


写真5. 作用部に見られる摩擦痕；筆者撮影

位であり、2の部分器面が平滑化に用いられた部位と推定されている [Jordan and Prufer 2007: 72-73]。このウシュベンカ出土の資料は厚みが不明であるが、施文に用いられた部分はその用途から先端が尖った形状と考えられる。この形状と機能の点で、Op.14 出土資料との差異が見られる。

これまで土器研究では、器面調整具として土器破片の再利用の例の他 [Jordan and Prufer 2017; Halperin and Foias 2010]、石製品や骨製品、木製品が推定されてきた [Shepard 1968: 66-67]。Op.14 の土製品が、特に木製の器面調整具を模して造られたものである可能性もある。しかし親指が接すると考えられる凹み部の整形度合いや滑り止め機能を有すると考えられる実用的な刷毛目状痕の存在から、器面調整具として実際に使用された蓋然性が高い。

この資料が実際に使用された器面調整具であった場合、器面と接する部分には摩痕が残ると考えられる。実体顕微鏡 (Nikon SMZ745T) を用いて 7.5 倍で観察したところ、摩痕と考えられる一定方向の線状痕が僅かに観察された (写真3、図9のbにおける斜線部)。またこの線状痕は作用部と考えられるb以外の部分では観察されなかった。このことからOp.14の土坑内から出土したこの土製品は実際に使用された器面調整具であり、この地点における土器生産活動の存在を示す重要な間接的証拠と言えよう。

## 8. 結論と展望：土器焼成址の証明

結論として2010年の排水管設置工事において発見されたOp.14の土坑は、土坑の形態、変形した不良品や器面調整具といった間接的証拠から、本来は土器を焼成するための掘込型窯であった蓋然性が高い。またOp.14の土坑は報告書に示されたような近代的なゴミ捨て場ではなく、ティカルプロジェクトの宿舎との位置関係と、出土遺物の特徴から、古典期後期におけるゴミ捨て場であると考えられる。つまりOp.14の土坑は古典期前期から後期にかけて掘込型窯として機能していたが、古典期後期の一時期にゴミ捨て場として二次的に利用されたと考えられる。

Op.30の土坑は現在、ホテルの拡張部の下にあるため再調査はできない。一方でOp.14の土坑は一部が未発掘のまま埋め戻されているため、再調査が可能である。この再調査によって図面や撮影等の正確な記録を行い、また報告書に示された土坑内部の石灰岩の壁面の状態を確認することが求められる。加えて可能であれば焦土、炭化物や灰の検出を行うことでより多くの間接的証拠を得ることが期待できる。

またOp.14の土坑に最も近い建造物4F-19、4F-20を中心とする区域が一つの土器生産区域であるならば、Op.14の土坑に形態的に類似するOp.30のような土坑が、周辺に点在している可能性がある。Op.14を中心として広範囲に発掘調査を行うことで他の土坑を検出し、土坑の分布と周辺の建造物や粘土の採取地である湿地帯との位置関係を明らかにすることも重要な課題である。もし最寄りの建造物群 (Str.4F-19~20, Str.4F-29~32) と周囲に展開するOp.14、Op.30の掘込型窯やOp.26、Op.27、Op.28等の掘込型窯あるいは失敗品の廃棄場所との関係が認められるのであれば、この区域がティカルにおいて古典期 (前期・後期) を通して継続的に土器生産活動が行われた地点として想定できる。

加えて、建造物4F-19、4F-20に対する調査も重要と考えられる。エリア4Hにおけるベッカーの事例では、建造物内の詰土から土器生産に関する多くの間接的証拠を得ている。そのため土坑の近くに位置する建造物群を調査することで、先行研究で示された他の間接的証拠を検出できる可能性がある。

上記の方法によって今後、エリア4Fにおける発掘調査を実施し、Op.14の土坑が土器焼成址であること、また周辺の建造物群を含めた範囲が古典期における一つの土器生産区域であることを、新たな間接的証拠の検出

によって実証していく。今回のティカルにおける土器焼成址及び土器生産区域の検討から、古典期ティカルではエリア 4H という非実用的な土器群を生産する区域と、エリア 4F という実用的な土器群を生産する区域に分かれていたことが想定できる。恐らくマヤ文字を含む極めて奢侈性の高い特定の土器群は貴族層工人によって製作され、より一般的な精製土器群はエリア 4H において一般層工人によって製作されるといった奢侈性に応じた分業が行われていたと筆者は想定している。また精製土器の製作には貴重な彩色顔料が必要なことから、エリア 4H の一般層工人は自由に精製土器を製作していたのではなく貴族層による一定の管理下にあったであろう。この精製土器に関わる二つの集団の活動は専門的なものであったと考えられるが、エリア 4F のような実用的な土器群の生産は周縁の湿地帯に近いいくつかの区画において分散的に行われていたと想定している。多くの民族例が示すように土器生産は乾季に行われるため、実用的な土器の製作を小規模に行う作り手は期間が限定された専門工人<sup>(註3)</sup>であったと考えられる。このような現段階での古典期ティカルにおける土器生産体制に関する想定を今後の調査によって個別具体的に検討し、その実態を明らかにしていく。

これまで土器焼成址の可能性のある遺構はいくつか発見されてきたが、Op.14 のような十分な間接的な証拠を伴う土坑は、古典期マヤにおいて稀有な事例と言える。特にティカルのような主要都市での土器焼成址の検出は重要な事例である。この事例は古典期マヤにおける土器生産体制の理解に大きく貢献し、また都市内外への土器の流通を理解する上でも今後有用なものとなるであろう。

#### 【謝辞】

本研究は北海道大学大学院文学研究科「共生の人文学」プロジェクトの助成を受けたものである。本調査を実施するに当たり、グアテマラ国立人類学歴史学研究所 (IDAEH) のモニカ・ペジェセル氏、ティカル国立公園及び文化遺産調査保存センター (CCIT) のエリザベス・マロキン氏には多くのご助力・ご支援を頂いた。また北海道大学の小杉康氏には調査に際して多くのご助言やご指摘、本稿の執筆に際しては熱心なご指導を頂いた。末筆ながら感謝申し上げる次第である。

#### 註

(註1) ベッカーは土器焼成遺構として窯を「直接的証拠」とし、一方で土器生産を示唆する各種の遺物に対して「間接的証拠」と呼称している。特に彼が扱ったティカル遺跡ではこれまで明瞭な土器焼成址が検出されていないことから、多くの「間接的証拠」から土器生産址の証明と土器生産体制の復元を行う重要性について述べている [Becker 2003]。

(註2) 筆者はベッカーと同意見であり、灰釉（自然釉）を特徴とする土器が後古典期に出現することを根拠に古典期において穴窯は成立していなかったと推測している。そのためロペス・ヴァレーラらのベリーズ、カショブ遺跡における古典期後期に帰属する2室構造 (double-chambered) の穴窯の検出 [Lopez Varela et al. 2001] について、ベッカーは検出された二つのピットが実際は別々の機能を持った遺構であり、穴窯ではないと判定している [Becker 2003: 111]。またカショブ遺跡の事例では穴窯と考えられる遺構の断面構造が図示されておらず特に灰原を含む焚口周辺の様相が不明である点や、焼成室の規模が小さい点、穴窯を使用した際の焼成温度の点によって当該遺構が土器焼成址であるとは考えにくいと筆者は評価している。

(註3) 「期間が限定された専門工人」とは乾季に土器製作を行い、雨季に農業やその他の仕事に携わる人を指す。すなわち彼らは「真の専門工人」ではない。ここで「専門」という言葉を用いたのは、往時

のティカルにおいて多量に生産された日用土器群が、個別の家庭レベルで生産されていたのではなく、湿地帯付近に居住する複数の小規模の工人集団によって生産されていたと想定しているためである。

### 参照文献

Becker, J. Marshall.

2003 A Classic-period Barrio Producing Fine Polychrome Ceramics at Tikal, Guatemala: Notes on ancient Maya firing technology. *Ancient Mesoamerica* 14(1): 95-112.

Carr, F. Robert and James E. Hazard

1961 *Tikal Report No.11 Map of the Ruins of Tikal, El Peten, Guatemala*. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Ciudad Ruiz, Andrés and Marilyn Beaudry-Corbett

2002 Homos de cerámica en centroamérica: descubrimiento y contexto. *XV Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2001*, edited by J.P. Laporte, H. Escobedo y B. Arroyo, pp.560-577, Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Halperin, Christina T. and Antonia E. Foias

2010 Pottery politics: Late Classic Maya palace production at Motul de San José, Petén, Guatemala. *Journal of Anthropological Archaeology* 29: 392-411.

Druc, Isabelle C.

2000 Ceramic production in San Marcos Actopan, Puebla, Mexico. *Ancient Mesoamerica* 11: 77-89.

Imaizumi, Kazuya and Leonel Ziesse

2017 Exploraciones en el cuadrante 6H de Tikal : Examinando posibles áreas asociadas a la producción alfarera. *XXXI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2017*, edited by Bárbara Arroyo, Luis Méndez Salinas, Gloria Ajú Álvarez, pp. 493-504, en la ciudad de Guatemala, Guatemala.

Jordan, M. Jillian and Keith M. Pruffer

2017 Identifying Domestic Ceramic Production in the Maya Lowlands: A Case Study from Uxbenka, Belize. *Latin American Antiquity* 28 (1): 66-87.

López Varela, Sandra L., Patricia A. McAnany and Kimberly A. Berry

2001 Ceramics Technology at Late Classic K'axob, Belize. *Journal of Field Archaeology* 28(1-2): 177-191.

Shepard, Anna O.

1968 *Ceramics for Archaeologist*, CIW, Publication 609.

Ziesse, Leonel

2010 *Rescate arqueológico y supervisión de los avances en la construcción del sistema de drenajes y alcantarillado sanitario para el Parque Nacional Tikal [Informe Preliminar de Avances]* . Parque Nacional Tikal, Flores, Petén.

原稿受領日 2019年5月20日

原稿採択決定日 2019年9月5日